

年間第3 2 主日

福音朗読 マタイ 25・1-13

2023.11.12 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日は、最初に言い忘れましたけど、このごミサの最後に教会としての七五三のお祝いということで子どもたちの祝福と七五三の飴があります。子どもたちがほんとにそれぞれの人生を元気に、そしていろんなところに神様の恵みを見つけて、それを受け取りながら成長して欲しい、そのために一緒にお祈りしたいと思います。

ところで、最近の若者の傾向としてよく言われることですが——子どもたちもそうなるのかな——失敗を異常に恐れるということが指摘されています。ほんとかどうかわかりません。わたしたちの世代だって失敗は恐れていたと思いますけども、それ以上に恐れるというか、あるいはその失敗した時の対処法がとてもしつかりするようなことなんだ、と。大きなことと言えば、交通事故を起こさないに越したことはないけれども、交通事故を起こしたら、起こした後にやらなければならないことがあるけれども、恐くなって逃げてしまうとか、会社で何か失敗したら上司に報告しなければいけないんですけども、それが怖いから事務所に火を付けちゃうとか、あるいは架空の強盗に襲われたことにするとか、何かとんでもないやり方で自分の失敗から逃れるみたいな傾向が——それは極端な例かもしれませんが——あるということはよく報道などで言われることですが、もしそうだとしたら、ひとつには失敗する者に対して異常に厳しい、失敗を許さないというこの社会の雰囲気、その中で失敗しないように、っていう教育が優先されるということがあるのではないかなあとと思います。

人間は、いろんなことで躓^{つまず}かないに越したことはないが、躓きは避けられないのだ。しかし、その時にもう一度立ち上がるということ、自分が躓いたことを受け入れて立ち上がることこそが、本当の人間としての強さであるし、それが、イエス様が絶えずわたしたちを死と復活を通して導かれるという信仰の道でもあると思います。

しかし、今日のたとえ話でいけば、愚かなおとめと賢いおとめで、花婿が到着するのを待っていて、5人は油も準備していた。5人は油も準備しないで、そして到着したときに油を買いに行っていたから、もう締め出されちゃったっていうのは、失敗が許されないみたいな、そういうたとえ話のような一見見えるわけです。

でも、ここで問題なのは、このたとえ話でおとめたちが待っている、そしてわたしたちも待っている、出会うのを待っているその花婿っていうのはイエス様、神様なん

だ、ということになれば、自分のともし火が消えそうになって、でも、油を持ってともし火がまだ残っている人のことを見て慌てふためいて店に行っちゃうってことがそもそも的外れな対処法なんだ、と。自分が愚かでもともし火が消えてしまったならば、消えてしまったということを率直に認めて、ごまかそうとしないで、花婿が来たときに「わたしのともし火は消えてしまいました」というふうに迎えばいい。それが、神様の前で、他人の^{ひと}ともし火が点いている、上手くいっていったりすることを気にして自分の本来の姿をごまかそうとするというところに、自ら恵みを閉ざしてしまう、そういう姿を感じ取ることができます。

ともし火は消えてしまったけど、でもそのままの状態を迎えれたならば、すべての恵みの源である方がいらっしゃるわけですから、そうしたら、消えちゃったならば新たなともし火を——「世の光」(ヨハネ 8・12)の方が来るわけですから——いただくはずなんです。

でも、外に買いに行ってしまうっていうのは、聖書の中でもう一か所ありました。まあ、その時には買いに行っていないんですけど。たくさんの人々がイエス様のお話を聞くために周りに集まっていて、夕暮れになっちゃった。弟子たちが「みんなを解散させてください。そうしたら、それぞれ村に行って食べ物を買うから」って言う。でもイエス様は解散させないで、「あなたたちが食べ物を配りなさい」って言いながら、イエス様ご自身がその恵みの源になって食べ物を分けてくださる(マタイ 14・14-16)。それと、「買いに行く」っていうのはちょっと共通してるんです。その時はイエス様が「外に買いに行くんじゃないよ」と。必要なものを外に、イエス様から離れて求めなければいけないんじゃない。そこに命の源がいらっしゃるんだから。「いるんだから」ってイエス様が気付かせてくれますけども、今日のたとえ話の場合は気付かなくて買いに行っちゃう。そこが、まあほんとの意味での愚かさって言いましょうか。

わたしたちもそういう意味では神様の前に、また日々の生活の中で、自分自身のいろいろな過ちの姿を自分に対してごまかしながら生きているっていうことはありはしないか。あるいは、いろいろな日々の人生の問題を解決するために、イエス様ではなくて別の所にその問題解決の手がかりを求めようとする——そうだったら、それはイエス様に属する者じゃなくて、自分がその問題解決を求めようとしている、この世の知恵だったり、いろんな策略だったりとか、そこに属する者なんだから、「わたしには属してない」っていうふうに——厳しい言い方ですけども、今日のたとえ話だったら「あなたのことは知らない」と言われても、その瞬間では仕方がないのではないかなあと思うんです。

勿論、わたしたちは何度でもやり直すことができる。それが神様の優しさだから、「知らない」と言ってもまたチャンスが来る、それがわたしたちが信じている神様の導きだと思えますけども、今日のたとえ話で言うならば、自分自身の姿を神の前に率直に受け入れているだろうか、そして、問題の解決を自分の中にある、また日々直面する問題の解決をイエス様に求めるのではなくて、他所^{よそ}に買いに行こうとしていないだろうかということには振り返る必要があると思えます。

イエス様が「わたしのもとに来る者は決して渴くことがない」(ヨハネ 6・33 参照)とおっしゃっている、その言葉に信頼する。でもそれは神様の時間の中で、神様のやり方で解決してくださるから、わたしたちは時にそれを待ちきれなくなって、耐えられなくて、今直ぐに、望んでいることを全部手に入れるって誘惑の中で、本来の解決ではない所に希望を置いてしまう、ということが多いのではないかなあと思えます。

わたしたちが、ご自分の所に命を求め、そして恵みを求めるように呼んでいらっしゃるイエス様に出会うんだという、その思いを新たにして、今日まずこのごミサの中でご聖体また祝福を通して思いを新たにして、それぞれの今問題を抱えている、あるいは課題を持っているならば、もう一度イエス様と共に向き合う、その思いを新たにして道を見出していく、その助けを得られたら良いなあと思えます。

わたしたちとどんな状況でも絶えず出会おうとされるイエス様の呼び掛けに信頼して、このごミサを通して恵みを願い合いたいと思えます。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>